

氏名	青木 慎一 ^{あおき しんいち}
学位の種類	博士(文学)
報告番号	乙第334号
学位授与年月日	2018年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第2項該当
学位論文題目	『源氏物語』の語りと絵一夕霧の童殿上を起点として
審査委員	(主査) 井野 葉子(立教大学大学院文学研究科教授) 加藤 睦(立教大学大学院文学研究科教授) 小嶋 菜温子(立正大学文学部教授)

I. 論文の内容の要旨

学位論文題目 『源氏物語』の語りと絵—夕霧の童殿上を起点として

(1) 論文の構成

序

第一部 夕霧と童殿上—表現・儀礼・史的文脈から

第一章 『源氏物語』の童殿上

第一節 童殿上の意味するもの

第二節 夕霧と童殿上—「滯標」巻の「内裏、春宮の殿上」から—

第三節 『源氏物語』の童殿上①—夕霧とその子どもたち—

第四節 『源氏物語』の童殿上②—弁少将とその嫡男—

第二章 子どもをめぐる語りと和歌

第一節 夕霧の「生ひ先」—成長をめぐる表現方法について—

第二節 「松風」・「薄雲」巻における明石姫君—「生ひ先」に託された思惑—

第三節 子どもの和歌—歌風と草子地への着目から—

第三章 結婚と儀礼—夕霧の婚儀を中心に

第一節 夕霧の通過儀礼—雲居雁との結婚を中心に—

第二節 『源氏物語』の結婚と儀礼—古注釈を手がかりに—

第二部 『源氏物語』の絵画的享受における物語解釈—夕霧そして光源氏の造型から

第一章 絵入りテキストにみる『源氏物語』享受（一）—夕霧物語の絵画化の再検討

第一節 徳川・五島本「源氏物語絵巻」における夕霧—柏木～御法段の情景選択から—

第二節 『源氏物語』の抄出本文—「伏見天皇宸翰源氏物語抜書」を始発として—

第三節 「夕霧」巻の絵画化—小野の里と鹿の情景をめぐって—

第二章 絵入りテキストにみる『源氏物語』享受（二）—近世の絵画化を中心に

第一節 「源氏物語絵巻」桐壺（幻の「源氏物語絵巻」）の絵画化

第二節 スペンサー・コレクション蔵「奈良絵本源氏物語」の挿絵と物語解釈

第三節 「鈴虫」巻における光源氏と女三宮—視覚化される関係性をめぐって—

付章

第一節 幻の「源氏物語絵巻」本文考

結

既発表論文との関連

参考文献一覧

使用本文一覧

(2) 論文の内容要旨

本論文は、『源氏物語』の作中人物である夕霧（光源氏の嫡男）の物語を中心に、物語を対象としたテキスト分析と、後世の源氏絵を対象とした絵画テキストの分析から、新たな解釈を提示しようとする研究である。

第一部では、『源氏物語』のテキストが対象とされている。第一章では、夕霧が八歳という若さで内裏と春宮へ同時に童殿上することは、史実に鑑みると、当代きっての権勢家藤原道長の嫡男である頼道の事例を髣髴とさせ、幼少期の夕霧の物語は頼道に通じる将来性を印象づける語りとなっていることが指摘されている。また、夕霧とその子どもたちの童殿上が夕霧家の発展を表すのに対して、弁少将とその嫡男の童殿上の有り様は家の衰退を表すことについても論じられている。第二章では、夕霧や明石姫君の成長の物語が「生ひ先」という言葉を軸にして語られていることが考察されている。また、『源氏物語』における子どもの和歌については、実母と離れた境遇にある姫君が詠む場合が多いことが指摘されていて、また、それらの和歌に草子地が付されていることの意味が考察されている。第三章では、夕霧の通過儀礼について、元服を機に夕霧の恋物語が濃密に語られること、夕霧の通過儀礼の中でもとりわけ婚儀の描かれ方が、史実を踏まえるのではなく、和歌的な表現によって語られること、その語り方は、史実を踏まえて語られる光源氏の通過儀礼の物語とは対照的であることが明らかにされている。

第二部では、絵画に描かれる夕霧像を中心に、後世における『源氏物語』の絵画的享受における物語解釈が対象とされていて、後世の源氏絵の場面選択、構図、人物配置、景物などの特徴が分析されている。第一章では、徳川・五島本「源氏物語絵巻」において家族とともに描かれる夕霧像が孤独な光源氏を照らし出す役割を担っていること、夕霧巻の小野の山里の秋の風景が鹿とともに描かれることなどが論じられている。また、「源氏物語抜書」の詞書と『源氏物語』の写本との本文異同の検討もなされている。第二章では、近世の源氏絵を中心に、幻の「源氏物語絵巻」（仮称）の「桐壺」やスペンサー・コレクション蔵の「奈良絵本源氏物語」などの特徴が分析され、それらが物語解釈と深く関わっていることが考察されている。幻の「源氏物語絵巻」（仮称）の「桐壺」では、従来の源氏絵には見られない場面が多数描き起こされ、源氏と藤壺の対面という密通に関わる文脈を絵画化する独自の傾向が認められること、スペンサー・コレクション蔵「奈良絵本源氏物語」は、大君や浮舟といった縁起の良くない人物の絵画化を回避する傾向があることが明らかにされている。また、源氏絵における「鈴虫」は、光源氏と女三の宮の夫婦仲をどのように解釈するかによって図様の差異が見られることが指摘されている。付章では、幻の「源氏物語絵巻」（仮称）の詞書と『源氏物語』の写本との本文異同が検討されている。

以上のような二部構成によって、夕霧の物語についての新しい解釈が提示されている。

II. 論文審査の結果の要旨

本論文は、日本古典文学の最高峰とされる『源氏物語』について新たな読みを加えるものである。

本論文の最大の特徴であり、かつ評価できる点は、多角的で的確な分析方法にある。本論文は物語の表現分析を基にしつつ、表現に内在する歴史性を浮き彫りにし、あわせて後世の絵画化における物語理解から物語そのものを反照する。一連の行論をとおして、『源氏物語』の新しい読みの地平を開墾するのに成功している。

第一部のテキスト分析においては、『源氏物語』の主人公の嫡男である、夕霧をめぐる語りの多面的なありようを検証する。従来は等閑視されていた、夕霧の幼少期の描写の特質を明らかにし、物語の全体のなかで位置づけなおした点は高く評価できる。夕霧の童殿上の儀礼の描かれ方が、藤原道長の嫡男藤原頼通の童殿上の事例を踏まえるものであることを指摘した点は、とりわけ重要であり、学界でも矚目すべき新見として受け入れられたところである。さらに本論文の優れた点は、物語を史実へと還元するに留まらず、歴史的な脈絡が物語の文脈のなかで変容され、あらたな文学的境位を拓くための機動力となっていることを究明するところにある。さらには幼少の子どもが詠んだ和歌についての分析も有効であり、夕霧の婚儀の描かれ方の特徴について古注釈書を渉猟しての解釈も周到かつ斬新である。

第二部は第一部での物語分析の成果を、後世の『源氏物語』の絵画テキストにみる夕霧の造形と対照することで深化させるものとなっている。本論文を、享受史や他領域も視野に入れてのパースペクティブの広い研究たらしめるもので、きわめて有意義な構成である。『源氏物語』の絵画化にみる物語理解については近年、美術史研究・日本文学研究の双方において注視されてきているが、本論文はここでも新見をさまざまに提示しえていて評価に値する。わけでも版本類にまで対象を広げての分析は、いまだその方面での研究が立ち遅れていることに照らしても、研究の進展に大きく貢献するものである。スペンサー・コレクション蔵の「奈良絵本源氏物語」について、および幻の「源氏物語絵巻」（仮称）の本文の問題は、『源氏物語』享受史における重要課題でありながら手つかずであったが、本論文によって初めて分析・紹介されたものであることも特筆される。

今後の課題としては、夕霧の物語を軸に本論文が獲得した新たな読みを、『源氏物語』全体の読みの地平へと発展させていくことが望まれる。

本論文が、『源氏物語』研究の進展にとってもたらす意義は深く、今後の研究への大きな指針を示した功績はきわめて大きいと言える。

以上の理由から、本審査委員会は、本論文を学位に相当する優れた研究と認めるものである。